

たは賤民といった、その家族の地位が明示されているが、この点は中国古代における社会現象と非常に類似している。中国古代においても良民・賤民制度が存在しており、中国及び海外の学者はともにこの問題を非常に注視している。このほか、関口先生からは特に文書の花押の問題についてご教授いただいた。花押は身分の高い者のみが所有していたもので、身分の低い者は「十」の字を代わりに用い、これは略押と呼ばれた。これらが多く用いられたのは江戸時代までで、その後は印章に取って代わられた。

小熊先生に取り持っていただいたことで、11月18日に神奈川県立歴史博物館の古文書を見学・調査する機会に恵まれた。ここでは主に日本の江戸時代の寺院文書、通関文書（仮に「通関文書」と呼ぶこととするが、文書を見る限り当時は「往来手形之事」と呼ばれていた）、及び江戸以前の分地に関する文書への理解を深めるこ

とができ、この場を借りて博物館の宮本先生に心から感謝申し上げる。宮本先生のご説明により、戸籍人口の登記、土地台帳、及び税収の状況の記録を中心に、日本の寺院における公文書の内容及び形式について基本的な理解を得ることができた。現在見られる帳簿・記録簿と非常によく似ているように思われた。また、当時は人口の流動に対し非常に厳格な管理が行われていたため、多くの地点に関所がもうけられており、通関文書は非常に典型的に見られるものであった。地点間の移動で関所を通過する場合には、この通関文書が必要であった。

日本で収蔵されている中国の古文書も日本の古文書も、その数は私が調査した範囲を遥かに超えるものである。特に日本の古文書は膨大な数が存在しており、日本の歴史、社会、文化、経済を研究する上で非常に重要な文献資料となっている。

## 神大訪学小記

高 志明  
(北京師範大学)



大学を訪問した日本での日々は、あまりにも短く、あたかもなかったかのようにさえ思えます。しかしその経験はすでに私の心に刻まれています。

日本に着くや否や、この国の「温もり」を感じました。飛行機が成田空港に到着したのは夜10時過ぎでしたが、携帯翻訳ソフトに頼りながら道を尋ねて、事前に予約していた空港のカプセルホテルを見つけました。道中私を驚かせたのは、真夜中だったにもかかわらず、私が助けを求めた人は皆親切だったことであり、ある若い警察官はわざわざ私をシャトルバス乗り場まで連れていってくれました。このような見知らぬ人に対する親切心、日本人の謙虚さと日本社会の節度について賞賛せざるを得ません。

日本で病気にかかってしまった経験は印象的でした。翌日、東京から横浜に来て、タイミング悪く病気の痛みに襲われ、思いがけず日本の医療サービスを体験しました。その日の午後、成田紅音さんと彼女の同僚、留学生の張韜さんが私に付き添ってくれ、神奈川大学近くの神戸病院に行きました。診察を待つところから点滴が終わるまで4、5時間かかりましたが、彼らがせつせと私の

世話をしてくださったことに私は心から感謝の気持ちでいっぱいになりました。この医療経験によって日本の医療サービスの秩序と便利さも感じました。

3人の先生のごことは一生忘れられません。まずは指導教員の鈴木陽一教授です。鈴木先生は60歳過ぎですが、一番の特徴は上

唇にたくわえたふさふさとした髭です。鈴木先生はとても優しく、物がひしめく研究室で私と会ってくださいました。研究室の面積は小さくはないのですが、図書資料が空間の90%以上を占めています。先生の机は



鈴木陽一先生の研究室で。



入り口からたった2メートルぐらいの距離にあります。鈴木先生は中国語がとても上手で、考えもはっきりしていて、話にユーモアがあります。面談は30分から40分続きました。お別れの際、先生が書いた中国小説の研究に関する本を贈ってくれました。鈴木先生の研究室を離れて、日本の学者の仕事熱心さと「書物の山に深く入り込み、めったに出てこない」という言葉通りであるということに感嘆させられ、心の中から敬慕の念が自然とこみ上げました。



授業後、佐野賢治先生と。

次は中国民俗学界で大変有名な佐野賢治教授です。佐野先生はもう古希の頃かと思われ、白髪混じりの髪は少し薄いながらも、後ろにきちんと整っていて、とてもしゃっきりしておられます。服装は洗練されていて、振る舞いには

節度があり、熟練でかっこよく、若い頃の英気がひしひしと迫って来ます。佐野先生は学生の報告を子供のような純真な笑顔で聞きます。学問に本気で没頭している人だけが澄んだ心を持ち、雑念のない人だけが、童心を

失わずにいることができるのだと思います。先生と一緒にいると、春風に浴すがごとく感じました。日本での学校訪問期間は主に先生の授業、学会会議への参加、先生と生徒の会食で過ごしました。このような経験は一生の貴重な栄誉です。

最後は非文字資料研究センター長の小熊誠教授です。小熊先生は50歳ぐらいで、背が高く、細面で黒縁のメガネをかけ、黒いダストコートを着ており、お洒落で才気あふれています。小熊先生は中国語がそれほど流ちょうではありませんが、非常にユーモアがあって、時にはチャームな仕草をされるので、とても親しみを感じます。訪問期間が終わる前に、先生はわざわざ日本の風情あふれるレストランで送別会を開いてくださり、私はひとしお光栄に感じました。



小熊誠先生と会食。

横浜での滞在期間、日本の風土と人情、学者の魅力、学会会議の謹厳さと有益性などは私に深い印象を与えました。一生忘れることはないでしょう！

## 過去と現在の間の舞踏



アナ クリスティーナ ヨコヤマ  
(サンパウロ大学)

舞踏における現在の伝統的な日本文化の要素とは何だろうか？

この疑問から、私は神奈川大学非文字資料研究センターで実地調査を行った。横浜にある大野一雄舞踏研究所での大野慶人による舞踏ワークショップに参加すると同時に、私は慶應義塾大学アート・センターの土方巽アーカイヴ、東京国立博物館、鎌倉の寺院や池上本門寺、森アーツセンターギャラリーで開催された新北斎展を

訪れた。また、歌舞伎座で二つの演目を観たりもした。

私の目的はこの短期間に様々な日本の芸術表現にアクセスすることで、大まかに文化的概観を把握するというものだった。このような形で、造形芸術、演劇、音楽、宗教、詩、新たな文献との出会いを、大野慶人との舞踏ワークショップにおいて反映させていった。

大野慶人はイメージ、テーマ、記憶、客体、自然の要素から自身のワークショップを行った。そうしたものは